体験版
ストーリー付き３DCG集
鮮血の女武闘家
ざこきゃら堂

見習い神官

「お、お待ちなさい！　悪党！」

その娘は、唐突に、女武闘家をある組織の一味と決めつけた

「この魔弾、大人しく受けなさい！」

敵意はあるが、殺気がない

「ふんぎゃああぁあああああああ！！！」

だから、素早く後ろに回り、膝の裏を軽く押し、尻もちをつかせた

「かかかか、勝ったつもりですか！　これから大勢仲間がきます！」

「目の前に悪の一味が…」

――心話魔法か

見た目とは異なり、それなりの実力者であるようだ

「ほほほ、本当だって！」

服装からして、神殿に勤めているのだろう

「いま、忙しいって、ナッちゃん！？」

そして、仲間は大勢こないらしい

「ふふふ、仲間が大勢きます、逃げても無駄です」

「……あの……誤解だ。わたしは賞金稼ぎで、その一味を追っている立場だ」

「それは、表の顔ということを知っています！」

「……？」

引っかかる物言いに、疑問をぶつける前に

「ふんぎゃあああああ！！！？　乱暴はやめて、大人しくお縄にですね！！」

女武闘家が、とっさに反応し、粉砕したのは、魔法の攻撃弾

ーーこの娘を狙っていた

「いまのは、君への攻撃…」

「先輩ぃーー！」

駆け付けたのは神官達だった

「っ……」

娘は見習いらしい

見習いの娘は、自分から神官達に抱きついていた

ーーこの娘に魔弾をはなったのは、この者達なのは、間違いない

「すごいです、さすがです！」

神官見習いの娘は、大喜びだった

賞金稼ぎが組織の一味である証拠を、先輩神官が掴んだのだ

「やりましたね！　これで街は平和になります」

女武闘家が拘束された台は、馬に繋がれていた

このまま、神殿に連れていかれる予定だ

「えっとぉ、なんか、悪党のわりには、楽していませんか？　とういか、あたし、徒歩で帰るんですか？　一人で～？」」

先輩の神官は、それではと、一緒に連行することを提案する

「本当ですか！　やったー！」

「…その女が近寄れば、殺して、逃げるぞ」

「んぎゃ！？」

喜んでいた見習いの娘は、震えあがった

徒歩で一人で帰るのは、みじめではある

それより、街の中、さらし者のように連行される姿に、かすかに同情していたのだ

――バカだな、あたし……悪党なんかに…

先輩神官が舌打ちをしたことに、見習いの娘は気がついていない

長いこと移動して、長いこと揺らされている

「良い眺めだ、ひひ」

連れていくべき神殿から、遠ざっていく

「あんたは、途中で逃げ出して、仲間の一味に
犯されまくって殺されたって筋書はどうだい」

「……」

「かわいい後輩には、貴様を見つけた褒美に、
新人の儀式をしてやるつもりだったのにな」

神官の一人が笑う

見習いの娘が、抱きついていた男だ

「まあ、こんなこともあるさ」

酔った男たちが、揺れ続ける白い塊に、気がついた

酒瓶を高くあげて歓迎する

見習いの娘が、叫んでいた一味のアジト

そこが、入って行く先だった

自分たちを追っている賞金稼ぎの女

あっさり捕まるほど弱く、予想以上においしそうな身体であった

すぐ殺す必要はない

鎖が緩められ、水中に落とされる

一部で有名な賞金稼ぎといっても、この程度

白い塊が苦しむ姿は、魔鏡に映されていた

もがくたびに、白い肉に鎖が食い込み、乳首が立つ姿に、興奮と期待が満ち溢れる

もうすぐ、この身体を、直に触れるのだ

「……っ……」

乳頭から滴り落ちる水滴

顔に張り付く髪

「ひひ、俺が最初でいいよな」

神官が、いや、一味の一人が嗤う

女武闘家が、一味のアジトを、魔力で探っていたことにも気がつかない

――…一味の全員が集合

女武闘家は、気配遮断スキル持ちも、見逃さない

――囚われの者は、他になし…

両腕、両足に魔力をこめ、拘束の鎖を引きちぎる

いくつもの闇の組織をつぶしてきたという銀髪の賞金稼ぎの噂

吟遊詩人のでっちあげだと決めつけていた

一味は認識を間違った

対応を間違ったのだ

「先輩は、あの人は…悪い人でした」

泣いて過ごしているかと思っていたが、
なかなか気丈なところがある

「あなたの事も調べました……賞金稼ぎで、手段を選ばず……汚いこともしていると……神殿から口止め料を要求したんですよね」

「……何も話すつもりはない」

「間違ったことは謝ります！　だから、ちゃんと生きてください！」

振り返らないことを、聞き耳をもたないと誤解されているらしい

見習いの娘への危険を考える
――誤解のままでいい
口止めは、神殿からの申請だった事も

精霊神の試練

「ねえねえ、おじさん、この人混み、どうしたの？」

「お嬢ちゃん、こんなところに居ちゃいけねえなあ」

半魔の娘は、妖術で見た目を人間に変えていた

普通の者なら見破られないだろう

「あの賞金稼ぎが、魔族の手先になったって噂だ」

街の守護騎士が、高らかに宣言する

【精霊神様の慈悲により、試練を与える】

【潔白ならば、試練が終了したのち、生き延びるであろう】

「えーー気になる、どうして、あの女の人、磔になっているのぉ？」

「魔族のアジトを知っているらしいんだけど、賞金稼ぎは、知らぬ存ぜぬだとさ」

「嘘か本当か、この国の危機を救ったこともあるらしい。それで、温情がでたのさ」

ーー実質、死刑さ

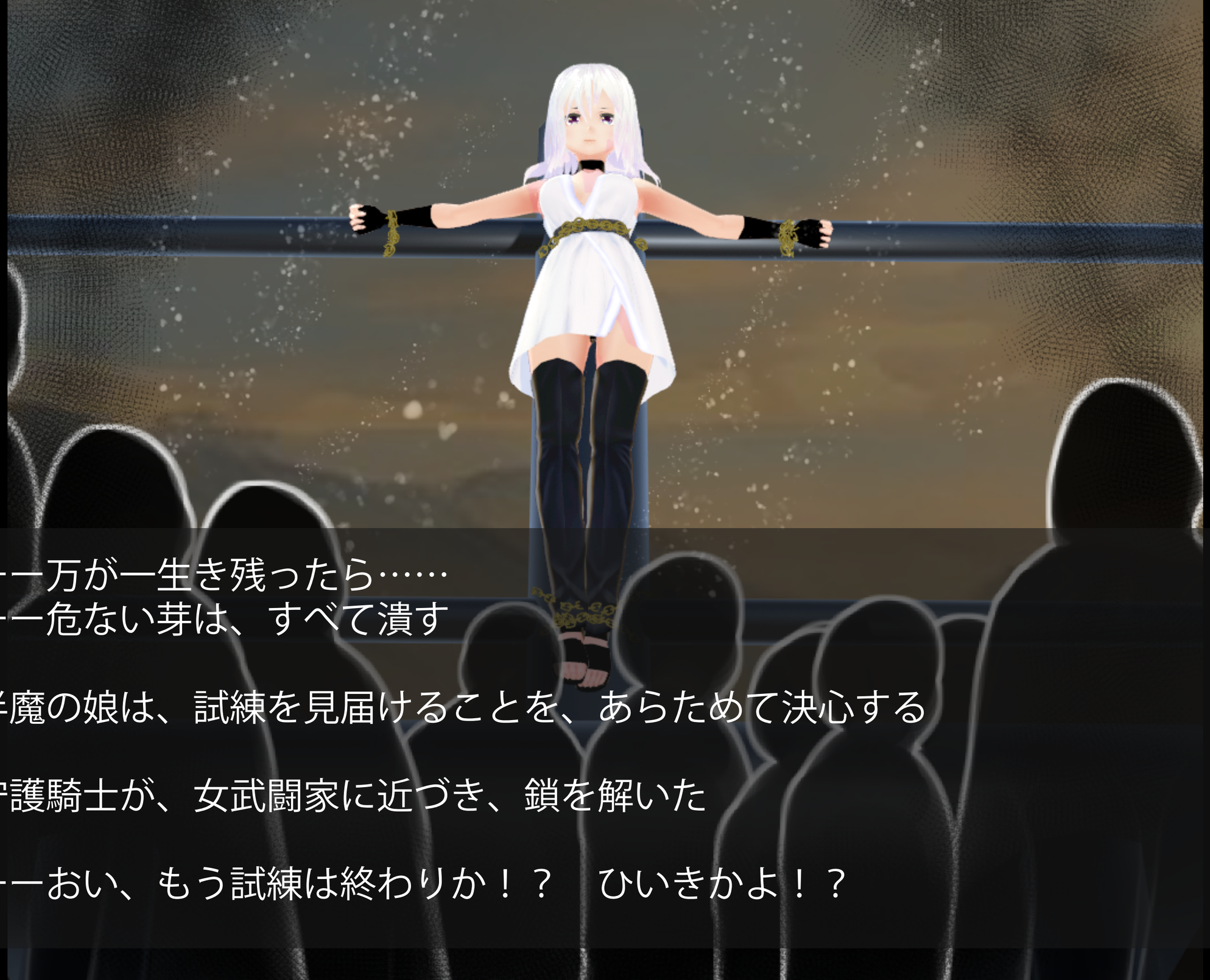
「……こりゃ、直接手を下すまでもないかな」

「ん？　何か言ったかい、お嬢ちゃん」

「…可哀そう…はやく終わればいいのに……」

「あー、そうだなあ…」
話しかけられた男は、口を濁す

寒さに耐えきれず、死んで終わるのが通常

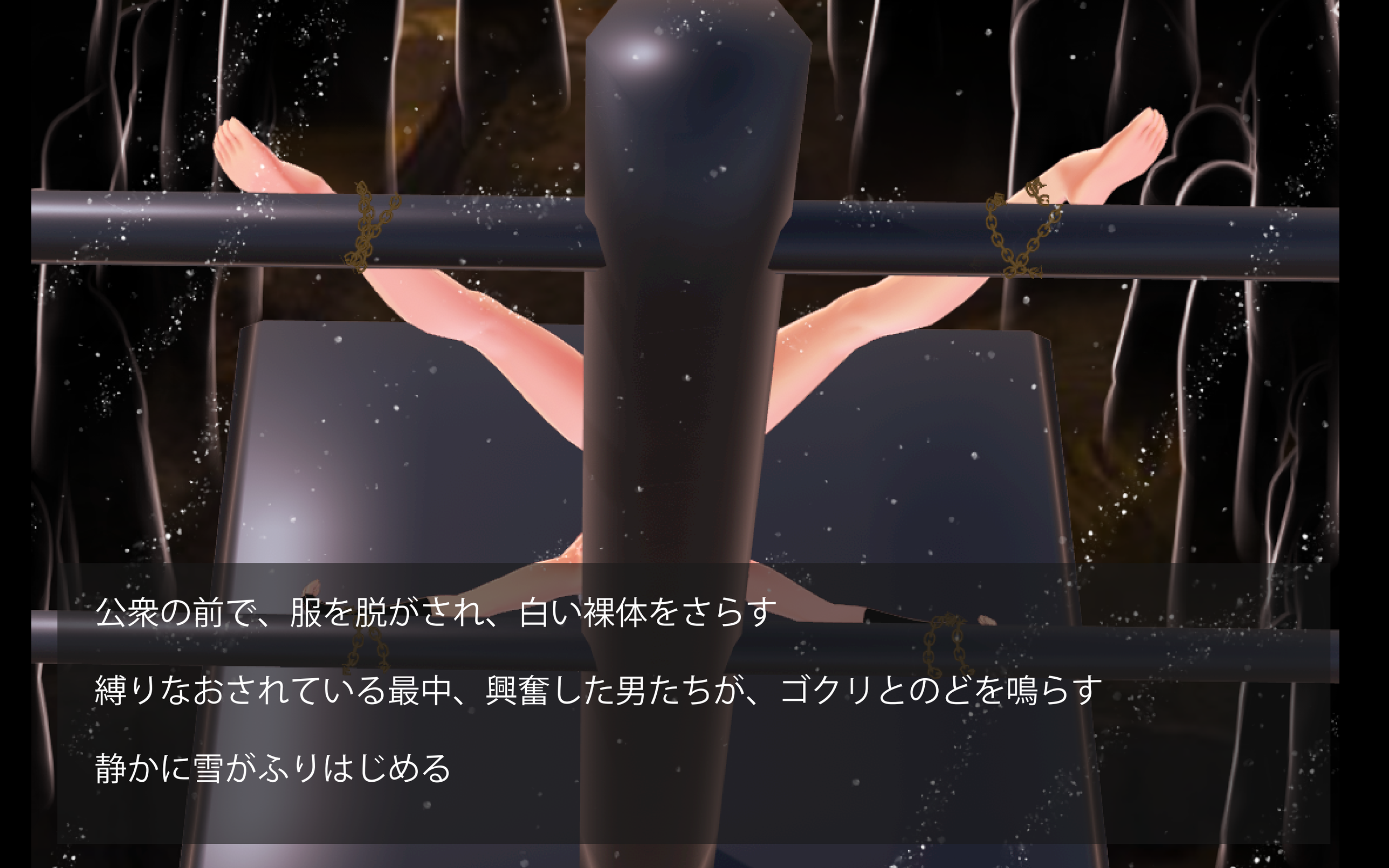


――万が一生き残ったら……
――危ない芽は、すべて潰す

半魔の娘は、試練を見届けることを、あらためて決心する

守護騎士が、女武闘家に近づき、鎖を解いた

――おい、もう試練は終わりか！？　ひいきかよ！？



公衆の前で、服を脱がされ、白い裸体をさらす

縛りなおされている最中、興奮した男たちが、ゴクリとのどを鳴らす

静かに雪がふりはじめる

いつ死ぬか賭けをしている者が出てきた

「もったいねえなぁ」
「触りてえ」
「試練とやらに、参加させてくれねえかねぇ、ひひ」

守護騎士が高らかに宣言する

【夜を超えれば試練は終わる】

【その間、この者をみることは許さぬ】

「いつ死んだかわからねえじゃねえか、こっちが拷問にあっているみたいだぜ」

見物客が帰っていった

見張りの守護騎士の横を通り過ぎ、男達が近づいてきた

主人らしき男が呪文を唱え、怪しげな薬を製造し、従者が、女武闘家の秘部から薬を入れる

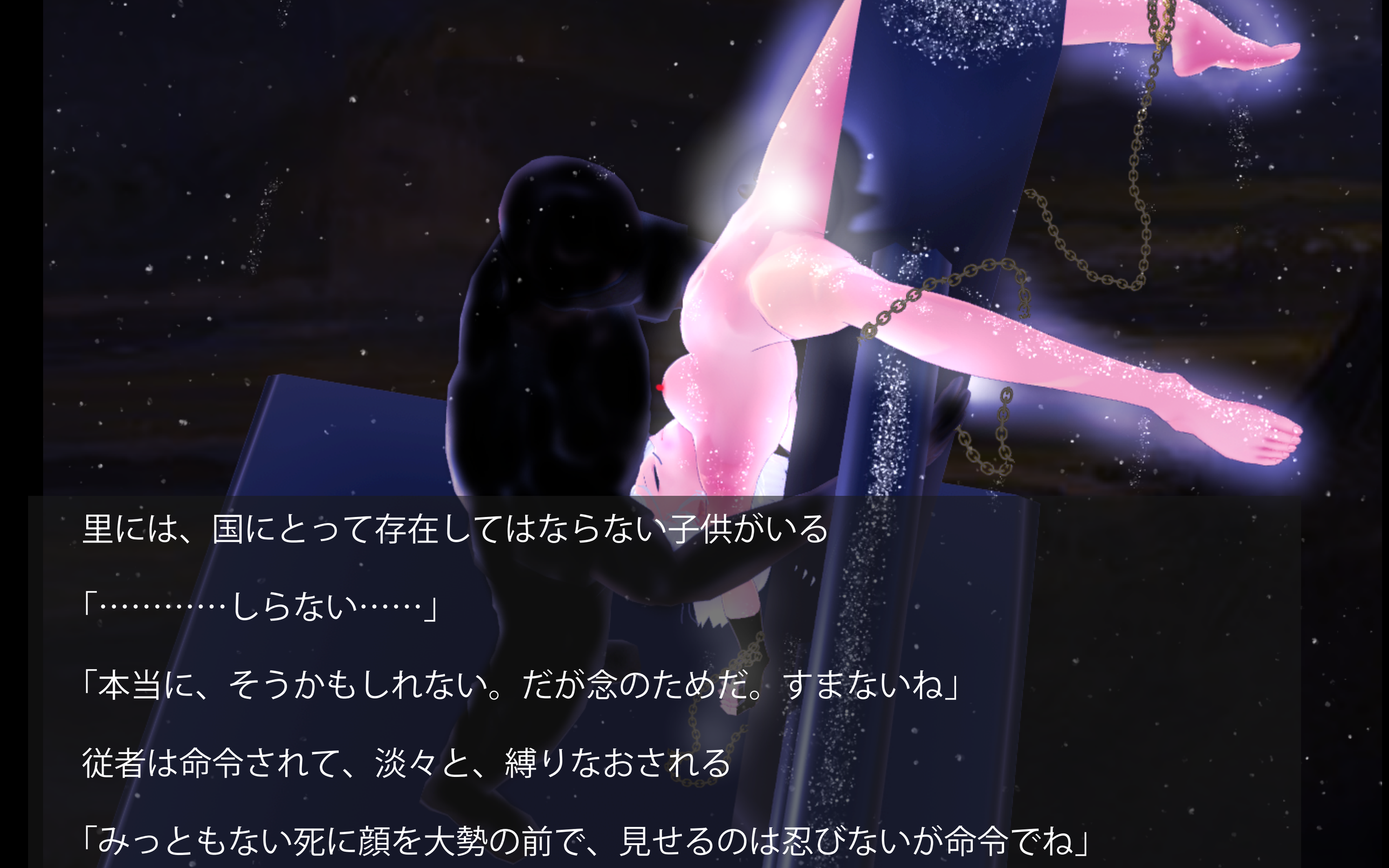
「ぐっ…！？」

内臓が、瘴気に侵されて、血を吐く

「さて、里の入り口を教える最後のチャンスだ」

「……」

「目的は君を痛めつけることではない。すぐに解毒剤を飲ませ、試練は不当だったと謝罪し、大金を与えよう」



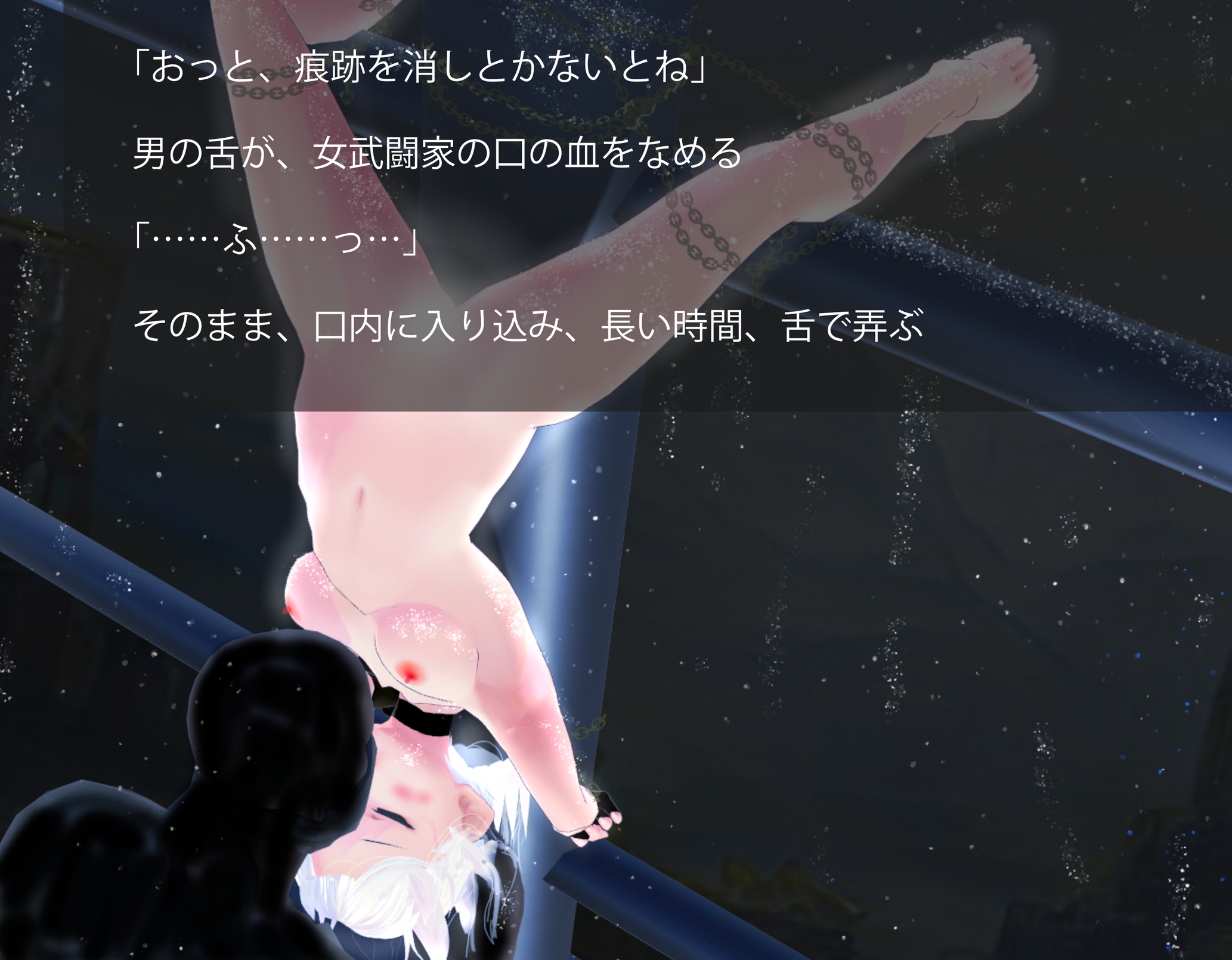
里には、国にとって存在してはならない子供がいる

「……しらない……」

「本当に、そうかもしれない。だが念のためだ。すまないね」

従者は命令されて、淡々と、縛りなおされる

「みっともない死に顔を大勢の前で、見せるのは忍びないが命令でね」



「おっと、痕跡を消しとかないとね」

男の舌が、女武闘家の口の血をなめる

「……ふ……っ…」

そのまま、口内に入り込み、長い時間、舌で弄ぶ

――……集中を…

女武闘家は、全魔力を体力の温存にあてていた

夜は超えられるはずだった

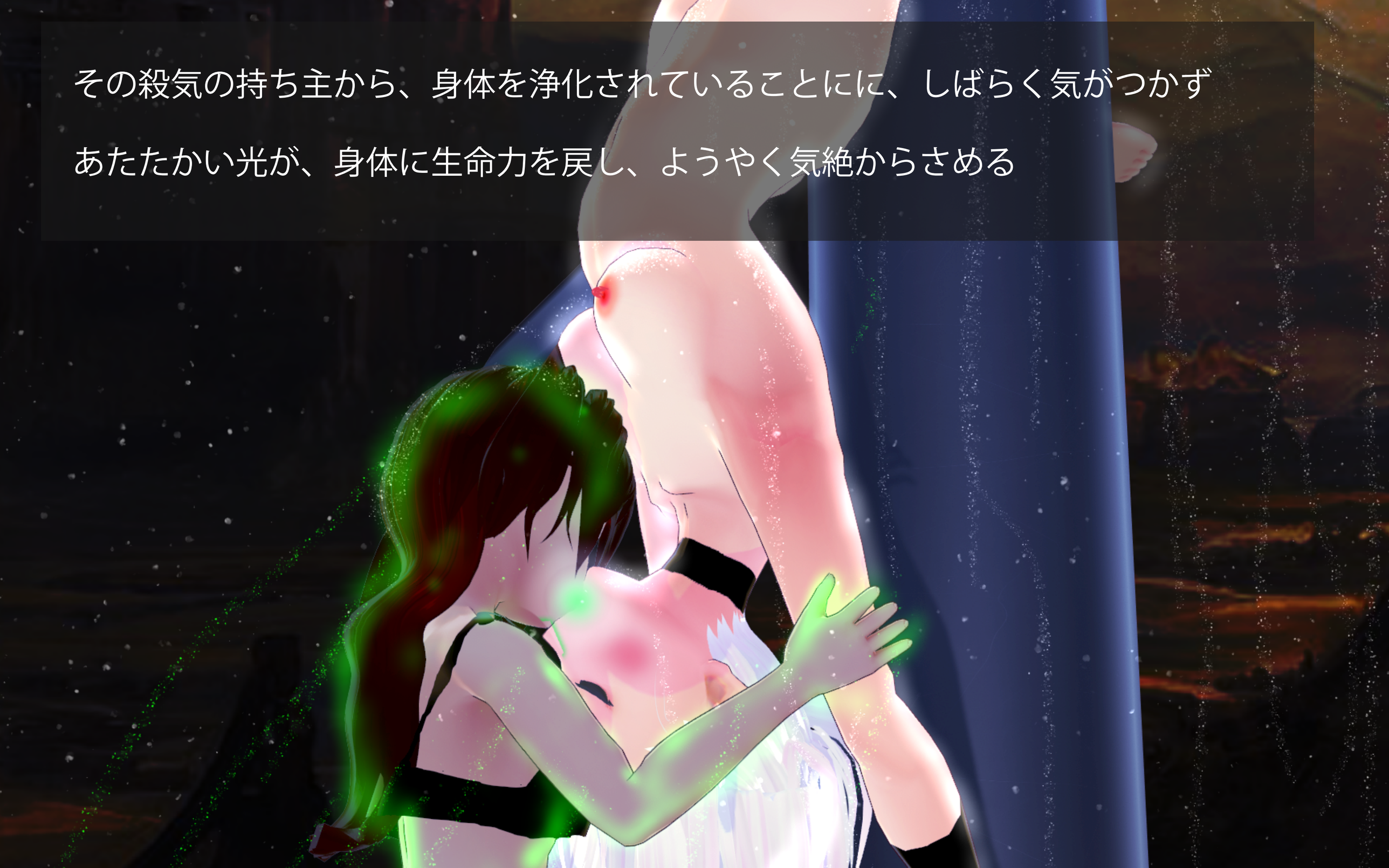
身体に入れられた瘴気が、それを上回る早さで女武闘家を浸食するまでは

――どちらにせよ…だったな……

昼に感じた殺気を、思い出す

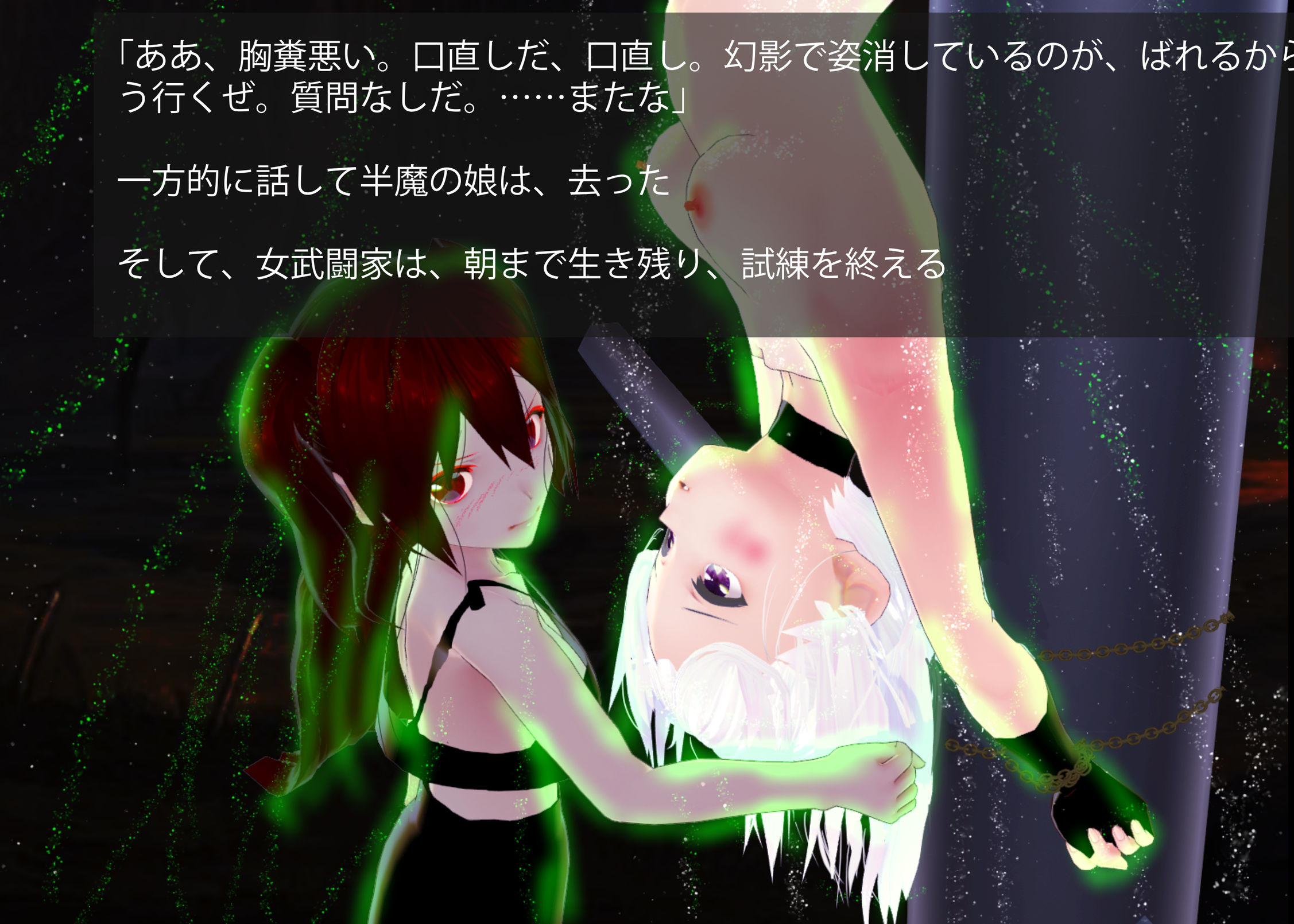
女武闘家は、誰にも殺される気はないだが……

――あの娘は…朝になれば…安心するのだろう……



その殺気の持ち主から、身体を浄化されていることにに、しばらく気がつかず

あたたかい光が、身体に生命力を戻し、ようやく気絶からさめる



「ああ、胸糞悪い。口直しだ、口直し。幻影で姿消しているのが、ばれるから、もう行くぜ。質問なしだ。……またな」

一方的に話して半魔の娘は、去った

そして、女武闘家は、朝まで生き残り、試練を終える

【製作サークル名】

ざこきゃら堂

https://www.dlsite.com/maniax/circle/profile/=/maker_id/RG48158.html

２０２１年春発売